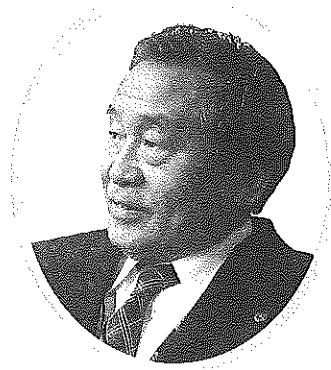


# 和顔愛語



佐藤 昭二

## 見えるものの奥にある見えないものを見る時

過日（6月18日）公益財団法人修養団の伊勢道場前館長であらせられた中山靖雄先生を伊勢にお訪ねした。私は中山先生とは初めてお会いしたのだが、先生から「懐かしい、逢いたかった」と何度も言われ、そのお言葉とともに先生ははらはらと涙をこぼされた。前会長の古賀さんを介してお互いのことを知っており、よくよく中山先生のことを聞き及んでいたので今回の対面は私にも初めてのよな気はせず、ましてや中山先生からそのようなことを言われ感激に打ち震えた。

会話も弾み対談も一山越えたあたりで、ふと、中山先生は「佐藤さん、貴方は本当に健康な方ですネ」とおっしゃられた。実は中山先生は全く目が見えない方である。それにも拘らず、お話をしている間にまるで全てを見通して居られるように私のことを感じ、そのようにおっしゃられるので非常に驚いた。健常者のはずである私の様な人間よりずっと物が見えていられるのだろう、と思った。きっと、中山先生は人生のはるか先まで見通して居られる方でいらっしゃるのだろうと感じさせられた。

中山先生とのわずかな会談の中での、中山先生から教えられたことは、ややもすると私達は、目が見えるが故に、見える目先の事柄に囚われてその奥にある本質を見失ってしまう事が多々あるのではなからうかということだった。

今度の東日本大震災で亡くなられた方、行方不明者合わせて約2万7千人と聞く。まさしく未曾有の大惨事だ。報道でその惨劇を見聞きするたびに誠に悲しい限りで有り、これらの方々のご冥福を心からお祈りせずにはいられない。しかし一方、これらのおおきく取り上げた方々のほかに、わが国では、殆んど人目に付く事無く毎年3万数千人の

方が自殺で亡くなっている。さらに無縁孤独死の数は自殺された方の数を上回るともいわれている。この毎年なくなっているおびただしい数の人々のことを、私達は意に介する事無く、そして日常は流れているように思う。

私はその「意に介する事無く流れる日常」に恐怖を感じる。私たちが実際に見える世界だけに価値を置き、本来見えていた見えない世界、本来感じられていた見えない世界を私たち人間の感性が蝕まれ、見えなくなってしまうことに。その能力を喪失していくことに。

東日本大震災が発生した際に、東京都知事の石原慎太郎氏は「天罰」と云う言葉を使われたが、それは東北の人々に対してではなく、日本国全体のまさに「意に介する事無く流れる日常」、すなわち目に見える功利打算、経済至上主義に走った国民全体への文学者としての叫びであったと、私は捉えさせて頂いた。

目に見える全ては、目に見えない陰からの現れである。それを称して昔から私達は「お陰様」と言っているのである。目に見えない「お陰様」を大切にしてきた私たちだからこそ、今もう一度、「目に見えない動きを日常で感じて生活をしていく」ことの重要性に気が直し、そして見つめ直す必要に迫られている。

我々人類が目に見えるメリットだけに価値を置き、目に見えないものに「意に介さない日常」をこれからも続けていくとするならば、第2、第3の災害も覚悟しなければなるまい。伊勢修養団での学びは私の68年の人生においても、改めて大変大きな節目であったことを気付かされた。